

パネル

本質的なものと見なし、また私秘的な感情や「言表不可能」な神秘的意識状態を事実上その核心と見なした彼の宗教論には、しばしば指摘されるとおり、一定の偏向があり、それに伴う盲点がある。しかし、まさにその偏向において、彼の宗教論は、当時の人々が一般に「宗教」と呼んでいたものの外側にある一群の思想運動へと、その射程を延ばしていった。「健やかな心の宗教」という彼の概念は、確かに一つの分類のラベルだが、同時に、そのような分類が可能な広さまで「宗教」を拡張する概念でもあったのである。

以上、〈投票としての本質〉という考え方に立ち、ヒックとジェイムズの宗教論、特にそれぞれの本質論の非包括性や偏向を積極的に評価しなおすことを試みた。唯一にして普遍、また不変の本質を論じることが、もはやできないだろう。しかしながら、「宗教」の内部で錯綜し、さらにはその外部へと伸びていく複数の類縁性（その輪郭は歴史の中で揺れ動く）のいずれかをとりわけ重要なものとして選び出し、そこから見えてくるもの、また、そこからしか見えてこないものを論じることがいわば「弱い意味での本質論」と捉えるならば、宗教哲学はどのような試みを放棄できないのではないかと私は考える。

「宗教の本質」と歴史性

——トレルチによるオットー批判より——

小柳 敦史

私の発表では、宗教哲学の現在を考えるための準備作業として、古典的な宗教本質論の内容を再検討した。そこで取り上げたのはルドルフ・オットーの『聖なるもの』である。オットーと同様に「宗教的アプリアリ」によって宗教の本質を規定しようとしたエルンスト・トレルチによる『聖なるもの』への書評（Troeltsch 1919）をてがかりに、本質論に対してしばしば為される批判とは異なり、「宗教の本質」の議論が歴史性への配慮と、論者によって程度の差を含みながら、密接に結びついていたことを示した。

『聖なるもの』に対するトレルチの根本的な批判は、オットーが「合理的なもの」と非合理的なものの関係を規定するという本書の主要な課題にほとんど成功していない（Troeltsch 1919, S. 76）という点にある。オットーは「聖なるもの」を合理的なものと非合理的なものから合成されたカテゴリーであると設定していたのである。トレルチとオットーでは「合理性／非合理性」の理解に差があるため、トレルチの批判を鵜呑みにすることは出来ない。しかし注目すべきは、オットーが「聖なるもの」のうちの非合理的要素Ⅱヌミノーズではなく、非合理的な要素と合理的な要素（Ⅱ倫理的な要素）の調和こそが宗教

の卓越性を測る「宗教的な尺度」であると意図していたこと、そしてトレルチもまた、宗教独自のアプリオリを認めながらも、宗教と倫理の調和が宗教の妥当性を測る基準となると考えていたことである。オットーとトレルチは、他の何かに還元出来ない宗教独自の要素を「宗教の本質」と考え、その解明を宗教哲学の課題としていたことは確かであろうが、それは彼らにとって宗教哲学の最終課題ではなかった。「宗教の本質」の探究は、人間精神の他の本質との連関を考察するためのものであり、その問題意識に規定されていたのである。

アプリオリな宗教性の内部での合理性と非合理性の調和（オットー）、あるいは宗教的アプリオリと倫理的アプリオリの調和（トレルチ）を歴史の中にある実定的宗教を判定する基準と考えることから、二人の関心は共に宗教と歴史の関係へと向けられる。しかしトレルチは、オットーの議論における宗教と歴史の関連についても批判する。オットーはヌミノーゼ感情を人間の素地（Anlage）に位置づけ、その現れと合理的・倫理的思考との調和が宗教史を形成すると考えたが、トレルチの目にそれは歴史的な発展とは無関係であり、同一のものが現れてくる連なりに過ぎないと映った。トレルチにとって歴史の問題とは、実際に何が宗教的かつ倫理的に「善」とされるのか―オットーの言葉で言えば「聖」とされるのか―という具体的な内容を伴った議論であった。歴史に対する両者の理解もまた、合理性／非合理性についての議論と同様、両者の思想的背景から慎重に論ずべき問題である。しかし、「宗教の本質」と歴史との関連についての理解の差とその帰結については多少考えること

が出来る。宗教的・倫理的な理念の実質的な価値を重視するトレルチは、歴史主義の問題へと巻き込まれる。「本質規定は本質形成である」と延べ、「本質」を語るとは固有の歴史状況に対する応答であると考えられるトレルチにとっては、「宗教の本質」の問いはヨーロッパにおけるキリスト教と神学の問題へと限定されるのである。一方、宗教と倫理の形式的な連関を重視するオットーは歴史的背景を越えて「宗教人類同盟」を組織することが出来たのである。

以上より、「宗教の本質」の探究が歴史性と関連しうるといふ可能性をオットーとトレルチの振幅の範囲で示した。もちろん、歴史性を帯びることが可能だからといって、当時の宗教本質論をそのまま支持出来るということにはならない。しかし、本質論対反本質論という単純な構図はもはや描けないだろう。

神経科学の冒険

—— 思考実験と宗教哲学の可能性 ——

松野 智章

神経科学者であるB・リベットによって衝撃的な実験結果が報告された。その結果とは、一言でいうと「意思に先行して脳が活動している」というものである。実験は一回転が二・六五秒で高速に動く時計盤面を被験者に見てもらいながら任意に一回右肘を動かしてもらう、というものである。その時、脳の電